

第2部

終了分の総括報告

1．特別支援学校に勤務する看護師の専門性の向上と自立への支援

(平成25年度～26年度)

特別支援学校に勤務する看護師の専門性の向上と自立への支援

・目的

現在、短期入院や在宅療養化に伴い、障がいのある子どもも家庭の中で生活するようになってきている。それに伴い、特別支援学校に看護講師（以下、看護師とする）が配置され、医療的ケアを実施しているが、児童生徒の障がいは重度・重複化し、看護師は専門性を認識して貢献することが求められている。岐阜県の特別支援学校の看護師たちは、学校間で日常的に情報を交換し共有する場がない状況であり、自主的に研鑽できるピアサポート的な集まりが必要と考えられた。そこで、初年度、本事業は、特別支援学校において勤務する看護師が、看護師として果たす役割や専門性を認識し、教諭や養護教諭と連携して児童生徒に安全で安心なケアを提供してよりよい教育に貢献できるよう、また看護師として自己研鑽できる自律的な集団として成長できるよう組織づくりを支援することを目的とした。また、当大学として、今後のより良い実習場所の開拓にもつながる可能性も視野に入れ、相互に理解し高めあえる関係づくりを目指していくこととした。2年目は、前年度の目的である“特別支援学校の看護師として自己研鑽できる自立的な集団として成長できるような活動”への支援に向けて行っていく中で、岐阜県の特徴として、特別支援学校が県下の広範な地域にまたがっているため特別支援学校看護師研修会（以下、研修会とする）に参加しにくい状況があることや、自主的主体的な研修会の運営の在り方についての課題があった。そのため、その検討を行いながら、引き続き、研修会を通してピアサポートとして成長できるように支援を行うことを目的に活動を行った。本事業の活動期間は平成25年度～26年度である。

・事業担当者

平成25年度：育成期看護学領域：勝田仁美、世一和子、谷口恵美子、長谷部貴子、山本真実、服部佐知子、瀧瀬なつ子

平成26年度：育成期看護学領域：勝田仁美、日比薫、谷口恵美子、長谷部貴子、服部佐知子、瀧瀬なつ子

・実施方法

1. 現状の把握

1) 資料などによる現状把握（平成25年度）

岐阜県の特別支援学校の医療的ケア及び看護師の現状について情報収集を行う。

2) 県内特別支援学校への視察と情報収集（平成25年度）

特別支援学校における状況を把握・理解するため、岐阜県内の特別支援学校2校を訪問する。

3) 遠隔の特別支援学校の現状の把握（平成26年度）

岐阜県の特別支援学校の医療的ケアの現状及び看護師の現状について情報収集を行うため、県北東部に位置する特別支援学校1校を訪問する（平成26年12月2日(土)）

2. 研修会の開催と評価

それぞれの看護師の各学校での悩みや戸惑いなどを出し合いながら、看護師同士が繋がって悩みを共有したり情報交換を行う意味について確認し合い、ピアサポートである研修会の自主的な運営・体制づくりを実現化するための方法を検討した。

1) 研修会の開催（岐阜県立看護大学において実施）

第1回研修会：平成25年12月21日(土) 13:00～15:30

第2回研修会：平成26年3月31日(月) 13:00～15:30

第3回研修会：平成26年8月30日(土) 13:00～15:30

第4回研修会：平成26年12月20日(土) 13:00～15:30

第5回研修会：平成27年3月31日(火) 13:00～15:30

2) 研修会の評価

評価は、第1回目、第2回目、第4回目の研修会で各研修会の内容や運営等に関する意見の把握のため、研修会参加者を対象に無記名自記式の質問紙調査を行う。

3. 自立的な研修会となるためのサポート

各研修会の中で、特別支援学校看護師として会を組織化しながら、自主的主体的に自己研鑽できる集団に成長できるように大学教員が支援をする。また、実績のある他県の特別支援学校看護師の会への参加を行う。

平成25年度：相談支援

日時：平成26年2月6日(木) 16:40～19:00

場所：岐阜県立看護大学303演習室

常勤看護師の運営方法等について相談にのる。

平成 26 年度：ピアサポートとして実績のある『兵庫県特別支援学校看護師研究会』への参加
日時：平成 27 年 2 月 28 日(土)

場所：兵庫県下の研究会当番校であった特別支援学校の会議室

特別支援学校に常勤で勤務している看護師（常勤看護師）と大学教員とともに参加し、その会の現状を把握しつつ、研修会の自主的な運営および企画のあり方について方向性を検討する。

4．事業の評価

第 4 回目の研修会では最終的な事業の評価として、これまでに研修会に参加した看護師全員に、質問紙調査への協力を依頼した。配布方法は、第 4 回看護師研修会への参加者には、会終了時に直接配布し調査の趣旨を説明し、同意を得たうえで質問紙に記入してもらい、別場所に設置した回収ボックスにて回収した。それ以外の参加経験者（第 4 回研修会の欠席者）には、郵送にて趣旨説明書とともに配布した。また、平成 26 年度はキーパーソンとなった常勤看護師を対象に面接調査を行い、研究的な取り組みにより、実現化に向けた課題等を整理していく。

・結果

1．岐阜県の特別支援学校および看護師の現状の把握

1) 岐阜県の医療的ケアに関する経緯と現状把握

近年、重複障がいのある子どもが特に増加し、特別支援学校での在籍者数は上昇傾向が続いている。平成 25 年度は岐阜県全体の特別支援学校や看護師の現状の把握を行ったが、岐阜県内でも例外ではなく、「岐阜かがやきプラン」により特別支援学校が新設された。岐阜県では、主に、13 の特別支援学校に医療的ケアを必要としている子どもがおり、医療的ケアを実施する看護師が 50 名弱配置され、看護師は、正規雇用ではないが常勤看護師が 2 校に 3 名いる。教育委員会主催で年に 1 回研修が開催されており、看護職同士や学校間で情報交換がしたい、学習したいなどのニーズがあるが、県内の看護師全体で集まったり、連絡を取り合う体制はない。

2) 特別支援学校への視察と情報収集

岐阜県内で、医療的ケアの必要な児童生徒が多く在籍する特別支援学校 2 校を訪問した。学校の特徴、構造、教育内容、看護師の役割等について説明を受け、実際に授業や看護師のケア場面を見学し、看護師から現状や課題、子どもの個別性と症状の変化、対応の難しさ、子どもの反応に対する教諭との捉え方の違い、医療機関が併設されていない不安と責任、主治医・家族との意見の相違による戸惑いなどを聞いた。また、1 校からは看護師全員で話し合い相談することの必要性や、ヒヤリハット防止への取り組みの効果、校内連携が良く取れている状況、常勤看護師の存在の大きさなどを知り、特別支援学校における看護活動の特殊性と求められる専門性について理解を深める機会となった。

3) 遠方地域にある特別支援学校の現状の把握

平成 26 年度は、本学が開催した研修会に参加しにくい状況がある遠方の特別支援学校の現状把握を行った。県の北東部に位置し、大学まで車で 3 時間以上を要する A 特別支援学校の視察を行い、非常勤勤務している 2 名の看護師から現状を聴き取った。当該校は小学部から高等部があり、重複障がい・知的障がい・病弱の生徒が通学し、日常的に医療的ケアが必要な児童生徒は 5 名、担当医からの指示書がある生徒がさらに 5 名いた。看護師は、養護教諭と同室で勤務し連携は密に取ることができる状態にある。また、担任や保健主事との連絡も取りやすく、連絡・相談ができていた。そのため、緊急な研修会に対するニーズとしてはなかった。本学が開催した研修会に参加しにくい理由として、開催の案内が看護師に届いていなかったこともあったり、冬は天候（雪）によって参加しにくいこと、本学の位置する羽島市は遠方すぎるという理由が確認できた。しかし、参加できなくても研修会の内容が知りたいという強いニーズがあった。

2．研修会の開催と評価

1) 特別支援学校看護師への参加の呼びかけ

平成 25 年度は、岐阜県下の、看護師が配置されているすべての特別支援学校の看護師を対象に、初めての参加の呼びかけを実施した。事前に、岐阜県教育委員会の主催する「医療ケア看護師研修会」（平成 25 年 7 月 24 日（水）開催）において、県内の看護師たちで自己研鑽する自主的な体制を構築することを提案した。そこで、看護師たちが集まって学んだり相談したりできる機会を持ちたいと望んでいることが分かった。その後、本学の看護実践研究指導事業として、県内の特別支援学校 13 校の校長および看護師 47 名宛に、研修会の案内文を送付した。この研修会は自主的な会であるため、参加は看護師個人の自由意思を尊重できるように、返信は個々人のはがきによる返送とした。

2) 研修会の開催と評価

第 1 回目の研修会（平成 25 年 12 月開催）は、看護師 22 名（出席率 49%）大学教員 6 名が参加した。研修は、本事業の趣旨説明、参加者と大学教員の自己紹介ののち、看護実践研究指導事業の代表者の講義「現在の特別支援学校における医療的ケアや看護師の状況」を行った。講義の中では本研修会の

スタンスとして看護師たちの主体的な運営で実施していけるよう、それを大学が支援していきたいというメッセージを含めた。情報交換では、他校の看護師との話し合いの重要性、学校管理体制の看護活動への影響、教諭との連携の難しさといった特別支援学校の看護師ならではの課題が挙げられ、研修会継続の希望と課題の解決に取り組みたいという意見が挙がった。医療と教育の価値観の違いによる葛藤、学内の健康管理システムなどについても意見交換が行われた。最後に、参加者の司会進行のもと、今後の活動について希望を取りまとめた。

研修会の評価として、参加者である看護師を対象に、研修会についての質問紙調査を行った。結果、22名中20名(回収率91%)から回答を得た。研修会の開催については、とても良かった14名、良かった6名、ふつう、あまり良くないは0名であった。ほとんど良い評価を得ることができ、自主的な会で、自分たちで良くしていこうと集まったことなどが挙がっていた。研修会の内容については、とても良かった7名、良かった12名で、ふつう1名、あまり良くない0名であった。実施日程や案内状・進行・資料、研修会の運営・場所・案内等の環境についても、ともに良い評価が得られた。特別支援学校の看護師に必要なと思うことについては、<コミュニケーションが大事><もっと知識が必要><教育のことをもっと知らなければ><特別支援学校看護師に大切な姿勢>があり、現状の課題認識では、<教育と医療とのずれ><学校による違いや共通性>が挙がった。研修会に望むこととしては、<意見交換が大事で解決を語りたい><会の有り方、方向性>の課題も挙がった。大学(大学教員を含む)に望むこととしては、<研修会サポート><情報提供><社会的役割>などがあつた。今後取り上げたい研修会の内容については、<組織内の円滑さ><ケアのこと><問題解決方法>が挙がり、研修会の中の問題解決法としてケースカンファレンスなども提案され、今後の研修会のテーマや進め方に示唆が得られた。

第2回目の研修会(平成26年3月開催)は、看護師14名、大学教員4名が参加した。参加した看護師に1回目の質問紙調査の結果も示しながら、今後自主運営していく研修会として、自分たち看護師たちの考えや意見を反映させていく運営の在り方そのものを検討した。研修会の目的を明文化したり、今後の開催場所や開催時期やそれぞれの連絡方法、今後の活動のあり方等について検討がなされた。その際、大学教員は、会の中心人物とはならないように常勤看護師が中心となって運営できるよう座席等も配慮した。また、その他、各校から日々のケアにおける悩みなど具体的な情報交換がされた。研修会終了後も、メンバーで立ち話が続くなど活発でお互い関係性や繋がりを深めている様子が見えた。

この研修会の終了後に質問紙調査を行い、12名(回収率86%)から回答を得た。研修会の実施について、とても良かった8名、良かった4名、ふつう、あまり良くないは0名であった。研修会の内容としては、とても良かった7名、良かった4名、ふつう1名であまり良くない0名であり、今回は話し合いができた、他校の驚くべき現状がありこの研修会で解決できると良いと思ったなどがあつた。研修会の実施日程や案内、進行、資料等も良い評価で、「皆さんの意見が反映されたものになって有難い」などの記載があつた。研修会に参加して思ったこと、特別支援学校看護師(自分)に必要なと思うことについては、<特別支援学校看護師としての姿勢><自己の現状の内省>、現状の課題については、<学校による違い、共通性>があり、研修会の望むこととして<より密は情報交換を希望><会の有り方、方向性>があつた。大学(大学教員)に望むこととしては<研修会のサポート><情報提供>があり、今後取り上げたい課題としては<入職時の看護師ガイドライン><学校ごとの問題点の検討><ケースカンファレンス><話し合いの場>があり、1時間半で開催されている研修会の時間については現状より長い方が良いという意見と現状で良いがほぼ半々であった。

第3回、第4回および第5回の研修会(平成26年8月、12月および平成27年3月開催)は、それぞれ看護師16名大学教員5名、看護師14名大学教員4名、看護師15名大学教員6名が参加した。この3回の研修会を通じて、平成26年度の研修会の企画内容だけでなく、平成27年度からの主体的な開催についての検討も重ねつつ、岐阜県教育委員会主催の特別支援学校看護師の研修(内容:ヒヤリハット)を受けて、今後どのように自校で生かしていくかや、大学教員から県内の遠方地域にあるA特別支援学校の視察報告、その他各校の看護師からの近況報告と現在の悩みや困っていることなどが話し合われた。また、第5回目では、常勤看護師2名からの兵庫県研究会への参加の報告が行われた。それを参考に、岐阜県での運営方法について具体的に検討し、年間計画を立てることとなった。

第4回目の研修会の終了後の質問紙調査では、研修会の企画について、とてもよかった5名、良かった5名、ふつう1名、余り良くない0名で、研修会の内容についてはとてもよかった2名、良かった6名、ふつう2名、あまり良くない0名であった。今回の研修会についての記載は、<今後の方向性が見えた><情報の収集ができた><看護師が集まる意義がある>のほか情報交換の場となった等の意見が挙がった。

3. 自立的な研修会となるためのサポート

初年度で、特別支援学校看護師の研修会を実施し、今後の研修会の継続や自主的に情報交換や研鑽を行っていく看護師たちの思いや意向が確認できた。研修会の開催を重ねるにつれて、常勤看護師1

名から相談があり、これからの自主的な進め方や、それぞれ経験年数や学校の状況によって研修会で行いたい内容のニーズが異なり、いつも愚痴に近い意見交換が必要である学校もあるが、それだけではなく、講師を招いて勉強をする会なども取り入れたい旨相談があった。また、大学の立場としては、自主的主体的に自己研鑽できる集団に成長できるようにどのような方法・方向性でサポートしていくのが良いのかを検討しながら進めていく必要があるかが課題であった。

それらを受けて、大学と特別支援学校の看護師とがどのようにうまく運営しているのか、また、看護師たちが自主的な運営を行っていくためにはどのような会の有り方が求められるのかなどについて知る機会を取ることとなった。そこで、特別支援学校看護師を対象とした活動を先駆的にやっている兵庫県特別支援学校看護師研究会の活動を視察するために、大学教員と、常勤看護師2名とともに参加した(平成27年2月28日(土))。

場所は研究会の会員の所属する神戸市内の特別支援学校内で開催された。この研究会には、兵庫県の特別支援学校看護師16名、サポーターである大学教員・医療機関看護師2名、神戸市教育委員会の担当看護師1名(市内の特別支援学校看護師の統括的な役割を担う)、大学院生1名とオブザーバー小児看護専門看護師1名の参加があった。

はじめに、特別支援学校看護師の交流として、所属校の特徴・生徒数・医療的ケアが必要な生徒数・看護師数と勤務形態・近況報告、医療的ケアの現状(教員の実施状況や宿泊研修への同行)などについて発表し合った。その後、質疑応答の形式で、以下の内容についてさまざまな意見交換を行った。内容は、研究会の目指すものが、兵庫県の特別支援学校看護師の専門性を向上することや勤務状況の改善などであることや、研究会の開催にあたりテーマの決定、参加者への連絡方法や開催する会場の選択方法、学習を深めるための講師の選択、年会費と納入・管理方法、周知方法、地域輪番制の具体的な運営方法についてなどである。また、研究会の立ち上げから10年目を迎えて、参加者のニーズが経験年数や学校の状況により異なってきており、その打開策の有り方なども目の当たりにすることができた。最後に、参加者全員で、会場となった特別支援学校の保健室・教室・プール・体育館など施設を見学した。学校管理者の理解も得て、児童生徒がいない土曜日に開催されていることも分かった。

4. 事業の評価

特別支援学校看護師研修会の本事業の評価として、第4回目の研修会への意見と同時に、これまでの研修会に参加した看護師を対象として質問紙調査を行った(第5回目は3月末であったためこの会で行う)。また、キーパーソンとなって中心的に活動した常勤看護師に対する面接調査を実施した。

1) 質問紙調査

研修会全体の評価として23名からの回答が得られた。参加回数は4回の開催中、4回すべての参加は7名、3回が4名、2回が4名で1回が1名であったが、連絡を受けたが参加できなかったものが7名あった。学校内での子どもをめぐる問題の取り組み方への変化があったもの(n=13)が8名、変化はなかったものが5名であった。変化の内容としては、連絡ノートの充実などの具体的改善を進めている2名、問題意識を持つようになった2名、看護師のスタンスなど捉え方自体が変化した2名、検討の機会が増加した2名、などであった。学校を超えた看護師同士での相談状況(n=16)では、相談できた8名、相談できなかった5名、その他2名であった。その相談状況としては、研修会の中で相談できた8名、他校訪問時にも相談できた2名、他校看護師との関係が深まった1名だったが、研修会に参加していない看護師同士との校内での関係が悪化したものも1件あった(これは、研修会等で得た情報を参考に学校における改善を提案しても現状維持を良しとする看護師との軋轢等であった)。他校の状況を知ることによって得られたこと(n=17)については、得ることができたものは16名であった。得られた内容は、具体的な方法が分かった7名、自校の状況が再確認できた4名、参考例の発見がある3名、自校の改善の必要性を認識できた2名、他校の状況が把握できた1名のほか、新たな障壁を自覚したものもいた。研修会の参加を経て、自分の気持や考え方の変化があったかについては(n=17)、肯定的な思考に変化した5名、自校や県全体の取り組みに対する意識が高まった4名、役割の再確認ができた3名、仕事に対する葛藤が生じた2名、改善の意欲が湧いた1名、学習への意欲が湧いた1名であった。今後の運営について研修会のあり方に望むことでは(n=21)、意見交換の場6名、スキルアップの場4名、専門的な知識・技術向上の場3名、学習の場3名、看護師教育システムの確立の場2名、協働したマニュアル作成の場2名、継続していくこと2名等であった(表1)。最後に、自主的な研修会の運営に当たり自身が果たせる役割について尋ね(n=20)、参加する役割9名、企画や運営6名、事務的な作業3名であったが、退職者が多いことや自校の問題解決で精一杯など役割を担うことの困難を3名が挙げていた(表2)。主体的な研修会の運営は看護師にとって慣れないことであり重責を感じるのか、「まずは参加すること」などの意見が多かった。しかし、「事務作業だけではなく、定期的な研修会を継続していき現場での課題を問題提起していきたい」や「学校、医療、在宅福祉機関と連携できる立場になりたい」、「常に勉強していく気持ちだ」など、前向きに捉えていることが伝わってきた。

表1 今後の研修会の在り方に望むこと

分類(件)	記載内容
意見交換の場(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・意見交換、学習の場となってほしい。 ・看護師が学校でも不安なく働けるよう、情報交換の場になれば良いと思います。 ・行くとすれば今後につなげていけるテーマにする。テーマも事前に決め、その内容を意見交換する。 ・機会があれば、ぜひ参加をして、看護師同士で相談をしたいです。 ・今のまま、ざっくばらんな感じが良い、と思います。 ・個人がもっと発言できるように。
スキルアップの場(4)	<ul style="list-style-type: none"> ・各学校の情報交換とスキルアップのための勉強の場としたい。 ・スキルアップする場にしてほしい。 ・各学校スキルアップできるような内容が良い。 ・自分たちが今、知りたい内容を勉強でき、実になるようにしてほしい。
専門的な知識・技術の向上の場(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校での看護師の役割とは何か。子供が安心、安全で学校生活を送るには、どのような援助を行うとよいのか、又、技術、知識の向上の機会としての場になればよいと感じます。 ・情報交換だけでなく、専門的な知識も付けられるような研修にあるとよい、学校によって知識やケアの仕方など違うのは、仕方がないと思うが、できれば片寄りがなくなるとよい。 ・専門知識を高められる研修会。
学習会の場(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・学習会等、業務に生かしていけるものが出来ればよいと思います。 ・年に1回くらい講師を依頼しての勉強会ができればよいと思っています。 ・定期的な学習会(現在の年1回の研修会を講義、講演にしてほしい)。夏休みなど長期休暇中に施設研修(在宅医療機関、福祉施設、訪問看護ステーションなどを見学)をし、連携できるようにしたい。
看護師教育システムの確立の場(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・特別支援学校における看護師の教育システムの確立(専門性の向上)。 ・教育内容(小児看護、障がい児看護(知的、精神発達遅滞、自閉症など)や重症障がい児看護(医療的ケア(在宅ケア)の実践まで、継続的に教育が受けられるようにしていきたい。
マニュアル作成の場(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・将来的に統一した様々な事例に対するマニュアル作成等できたらいい。 ・非常勤のみでは不安もあるが、マニュアル化されて、皆でできるとよい。
会を継続すること(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・継続していくこと。 ・本来、そうするものと思う。
その他(2)	<ul style="list-style-type: none"> ・横のつながりが普通になるようにしたいです。 ・人間関係もできたので、今度は研修会には参加せず、相談事は各自で行う。

表2 自主的な研修会の運営にあたり、果たせる役割

分類(件)	記載内容
企画や運営(6)	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的な研修会にするためには、各学校ごとに何らかの役割をできる範囲で割り振ることが望ましいと思います。 ・まずは参加すること。話すこと。 ・個人個人が参加者であり、運営していく者でもあるという意識をもつことが必要だと思います。 ・他校との情報のやり取りの橋渡しとなり、現在困っていること、悩んでいることがタイムリーに相談でき、自分の学校に取り入れるなど視野を広めより質の高いケアを行えるのではないかなと思う。 ・研修会に参加すること。 ・学校現場で働くことででてくる課題を自分たちで考え、解決していけるよう学習していきたい。 ・研修会も年間計画を立て、テーマも決まっていれば、その資料の準備などを割り振って協力してすることもできるのではないかな？ ・遠隔地のためなかなか研修会に参加できませんが、研修内容の資料など読ませていただくと有難いと思っています。
事務的な作業(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・定期的な研修会を継続していき、現場での課題を問題提起していく。 ・8月担当に決まったので頑張ります。 ・非常勤であり、学校に意見ができる立場ではないため、学校の名を使っている活動は難しいですが、出欠などのとりまとめなどの事務的なものはできると思います。 ・会場準備、資料作り。
役割を担うことの困難(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・進行を学校当番制にする方が良いと思うが、当校はパート5名で毎年看護師が3名程退職する中で主体性を持って研修会を行うことは難しいかと思われます。 ・事務的な事なら出来ると思いますが、会の運営や進行など表立った事は難しいです。 ・当面は自校の問題解決に向けて精一杯。
その他(3)	<ul style="list-style-type: none"> ・学校、医療、学福祉機関と連携できる立場になりたい。(そのためにも、非常勤ではなく、常勤看護師を全ての学校に配置していただきたい)。 ・微力ですが何かできることがあればと思っています。 ・常に勉強していく気持ち。

2) 面接調査

これまでの研修会の開催で看護師の核になって運営を進めてきた常勤看護師3名を対象にし、2名の協力が得られた。常勤看護師は、これまでの研修会を振り返って、勤務校の歴史的背景を踏まえ、常勤看護師の配置の位置づけや病弱児や医療的ケアを要する児の受け入れ体制についての周囲の教員の

理解を確認していた。そして、勤務校に居る複数の看護師も含めて、特別支援学校看護師への理解をまだ十分に得られているとは言い難い環境のなかで看護している他校の看護師の状況を把握しながら、岐阜県下でも先駆的な取り組みを行っている自校の存在と、自分たちが他校の看護師たちの役に立つて行かなければならない存在なのだという事を自覚し始めたことを語っていた。また、研修会の運営については、どうしても「常勤」だからと任されてしまうこともあったが、今後、勤務形態に分け隔てなく皆で協力し合って会を運営していきたいと話していた。そして、自身のスキルアップを図るためにも各校の現状把握や悩みを解決することと並行して、学習会を企画し、悩みを解決する手立てとしていけるようにしていかなければならない思いを新たにしていた。

・教員の自己点検評価

1．実践の場にと与えた影響

第1回目の研修会后、看護師たちから次回開催の希望が挙がり、今後の研修会を計画しようという看護活動の変化がみられた。今回の研修会の参加状況やアンケート結果からは、特別支援学校の看護師たちが、自らの役割の追究や自己研鑽についての意欲が高いことが分かったが、具体的な行動の変化を把握するには至らなかった。しかし、看護師たちが一同に集まって情報交換し、知識や技術を深めたいというニーズは高いため、生涯にわたり自己研鑽するための研修会を継続し、自分たちで発展させていくことの意味は伝わったと思われる。研修会は、常勤看護師を中心とした運営が行えるようにサポートする姿勢で取り組み、自主的に準備や運営が進められ、成果が挙がっている。また、質問紙調査の結果からは、研修会等を通して自校での問題を見直し、問題解決への取り組み方に向けた変化、学校を超えた相談、県全体への視点から改善への意欲などよい影響があった。一方で、雇用や看護師同士や教諭との連携の在り方に難しさも生じていた。

2．本学の教育・研究活動にと与えた影響

教育面では、1年次の学外演習を平成26年度より開始し、3年次の領域別実習でも希望が丘学園（現希望が丘こども医療福祉センター）での実習の際には、実習する学生全員が必ず特別支援学校を見学できるように計画するようになった。その見学では、子どもたちの生活における特別支援学校の位置づけや役割、個別教育課程の意味や教諭の実践の意図、特別支援学校看護師の役割や教諭や養護教諭との連携などを把握でき、学生も小児看護の視野を広げられている。また、研究面では、看護師たちの自主的な研修会に対するニーズを把握し、課題となっている本質を研究的に明らかにする取り組みに発展させることができる。

・今後の課題および発展の方向性

今回、特別支援学校の看護師たちは、現在の児童生徒の状況や医療的ケアの支援体制などに対する関心や自己研鑽への意識が高く、主体的で自立的な集団に発展できることが分かった。実際、質問紙調査においても、研修会の開催によって学校内で子どもをめぐる問題への取り組み方への変化が見られ、研修会の中で問題解決に向けての方法の検討が行われ、また、研修会の運営に向けた前向きな思考・意識の変化が見られている。岐阜県の地理的な特徴から、参加への意欲はあっても距離的・時間的・費用的な問題などで参加が難しい看護師も多いため、遠方の看護師には、今後、開催場所の検討や、参加できなくても資料を送付するなど、県下の特別支援学校看護師がともに成長する具体的な方法をさらに模索することが必要である。

その後（平成27年度）も、特別支援学校の看護師は、自主的に、近い地域同士や学校単位で担当者を決め、1年に3回の特別支援学校看護師研修会を継続して開催している。第6回目の研修会（平成27年8月開催）は、理学療法士を招いての講義を受けることをメインにし、大学ではなく西濃地区の担当校の地域で開催され、参加者は12名であった。テーマの決定や講師への交渉も自分たちで行って取り組んでいた。第7回目の研修会（平成27年11月開催）も、同様に自分たちのネットワークを活用して県内の特別支援教育の専門家と交渉して講義を含む研修会が開催され、開催場所は西濃地区の施設で、参加者は、看護講師20名、大学教員2名であった。この研修会では、講義に加えて、常勤看護師を中心に、現在の研修会の今後の開催回数など方向性を参加者らで検討して決めていった。第8回目の研修会（平成28年3月開催予定）は、岐阜地区の特別支援学校内において、施設内見学と講師を招いて動作法の勉強会を行う予定となっている。第7回目の時には、大学教員も参加したが、会の一員としての参加であり、看護講師たちは当日も司会・進行をはじめ、主体者として運営し、自分たちの会を自身で発展させていくべく歩みを始めていることが確認できた。